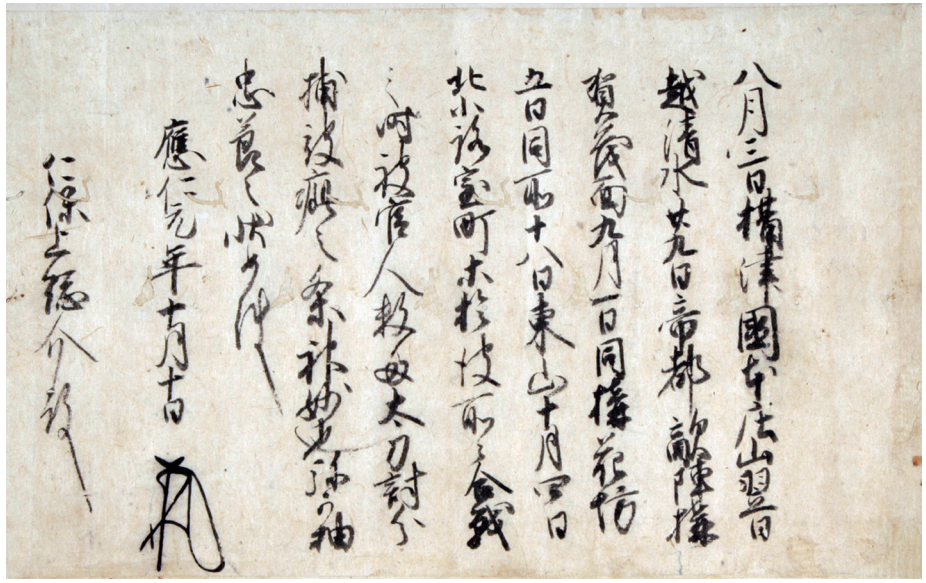
応仁の乱



＊三浦家文書甲3（63）「大内政弘感状」

解　説

応仁の乱（1467～77）は，有力守護大名である畠山・斯波両氏の家督争いと将軍足利義政の後継者争いが結びついた対立が原因で起こった内乱です。乱の経過や参加者の動向は複雑ですが，各地の有力武将が細川勝元を中心とした東軍と山名宗全を中心とした西軍とに分かれ，両軍あわせて約27万人といわれる兵力で，11年間京都を中心に東国と九州を除く全国各地で戦いました。その結果，将軍などの従来の権威が低下し，実力主義の世の中＝戦国時代が始まることになります。戦いの舞台の中心となった京都が疲弊した一方で，戦乱を避けて地方に下った公家や僧侶らによって，中央の文化が地方に広まったという側面もありました。

写真は，周防・長門・豊前・筑前の四か国の守護であった大内政弘が1467（応仁元）年西軍方として応仁の乱に参戦した際に，配下の仁保弘有という武士の働きを褒めた文書です。仁保氏は，周防仁保荘（現在の山口市）を本拠とする武士です（2-1-2「鎌倉幕府の始まり」参照）。大内勢が摂津を経て上洛し，「帝都」「賀茂面」「東山」「北小路室町」等々，京都の各地を舞台に戦っていることがわかります。

＊三浦家文書には，応仁の乱に関する文書がまとまって含まれています。仁保氏が，摂津における戦いで「大和足軽」，すなわち大和国の足軽を雇っていたことを示すものもあります（三浦家文書甲3（67））。
＊三浦家文書は，大部分が活字になっています（『大日本古文書家分け14 熊谷・三浦・平賀文書』，『山口県史』史料編中世3）。

山口県文書館所蔵アーカイブズガイド学校教育編
目次に戻る